博 士 論 文 審 査 書 （課程博士・論文博士）

論 文 名	「児童文化」の誕生 ー活動の諸相と誕生期「児童文化」の本質の分析ー」 （英文タイトル） The Birth of "Child Culture": the Phases of its Activities and the Analysis on the Substance of its Dawn		
学 生 番 号		氏 名	加藤 理

所 見

別紙、「論文内容の要旨および審査結果の要旨」のとおり

審査結果	可 ・ 否	学位記番号	第 13 号
主 査	鵜野 祐介	副 査	印
副 査	畑中 圭一	副 査	印
副 査	香曽我部秀幸	副 査	印

論文提出日	論文審査日	公 聴 会	可否決定日	博士学位授与日
2012年 12月 17日	2013 年 2 月 28 日	2013 年 2 月 28 日	2013 年 3 月 8 日	2013 年 3 月 19 日

学位申請論文（2012 年 12 月）内容の要旨および審査結果の要旨

論文題目

「児童文化」の誕生

－活動の諸相と誕生期「児童文化」の本質の分析－

学位申請者　加藤　理

論文審査委員

主査　文学研究科　教授　鵜野祐介

副査　元名古屋明徳短期大学　教授　畑中圭一

副査　文学研究科　教授　香曽我部秀幸

論文内容の要旨

本論文は、「児童文化」概念が誕生したと考えられる大正 10 年前後を中心として、誕生期の概念を根強く内在させながら活動が展開していく昭和 5 年頃までの、児童文化活動に関わった人々が残した一次資料を発掘しながら、「児童文化」という用語が誕生するまでの経緯と誕生の背景を探り、さらに、「児童文化」誕生当時の具体的な活動の諸相を分析することを通して、児童文化にかかわる新たな事実を求め、誕生期の「児童文化」の実像を明らかにする。同時に、様々な児童文化活動の実態の解明の中から、誕生期の「児童文化」が内在させていた概念の本質を探るものである。

Ⅰ部では、「児童文化」が誕生するまでの社会の動向を探りながら、「児童文化」が誕生した要因について分析する。そして、「児童文化」が誕生した時期について、新発見の資料をもとに現在確認できる最も早い使用例としての、大阪における後藤牧星の活動について論じる。

Ⅱ部では、仙台での誕生期「児童文化」の諸相について、スズキヘキ旧蔵資料をもとに分析していく。一つの地域の誕生期「児童文化」活動の全貌を明らかにすることで、誕生期「児童文化」の実態を解明していく。

Ⅲ部では、誕生期「児童文化」の広がりと展開の様子を、大阪、函館の児童文化活動、学校での児童文化活動、学校関係業者の児童文化活動、そして日曜学校や家庭の児童文化活動といった活動の分析を通して確認していく。

以上の考察を通して、「児童文化」の本質とは、一方で有用性の原理に基づいて形成に資することを期待して大人たちによって提供される活動や場、そして文化財とその中での子どもたちの創造活動と作品であるが、その一方でまた、有用性の原理とは無関係に子どもたちがただひたすら没頭して楽しむ行為や文化財とその中での創造活動と子どもたちの作品でもあり、この双方の概念を包含するものであると結論付ける。

審査結果の要旨

誕生期児童文化の特質を、これまでほとんど手を付けられていない膨大な一次資料の精査によって実証的に解明してみせた、独創性に富む意義深い研究と言える。本論文提出者の出身地である仙台での児童文化活動を研究対象の中心に据えたことによって、単なる客観的・傍観者的な歴史記述ではなく、郷土愛と自己アイデンティティの再認識を、論文作成を通して成し得たことが窺え、そうした提出者の研究姿勢に対し同じ研究者として深く共感する。論文の完成に至る地道でひたむきな努力と研鑽に対して心から敬意を表したい。

提出者によれば、先行研究の多くが、中央（東京）中心主義、活字資料中心主義、そして「学校 vs.社会」「芸術性 vs.大衆性」「児童中心 vs.大人中心」といった二元論的な発想に基づく分析に偏していた。この偏頗性を克服し、誕生期児童文化活動の総体的なダイナミズムを解明するために、提出者は仙台、大阪、函館など、全国数か所の活動を重点的に定点観測し、チラシ・広告文・子どもの作品・書簡など活字以外の文字資料や文献以外の物的資料を渉猟し、さらには関係者への聞き取り調査を行うなど、可能な限りの多元的・複眼的アプローチを試みている。こうした方法論は今後の児童文化史研究における一つのモデルを提示したと見なすことができ、その功績は大きい。

筆者が誕生期児童文化を考える上で特に重要な拠点のひとつと見なす、大阪の地にキャンパスを置く本学（梅花女子大学）に学位申請論文を出されたことにも感慨を覚える。本学元教授の上笙一郎氏を中心として 20 数年前に関西児童文化史研究が立ち上げられ、本学特任教授の畠山兆子氏らによって今日までいくつもの研究成果が発表されてきたが、筆者が今回取り上げた後藤牧星や高尾亮雄、國田彌之輔といった人物については、管見の限りでは正当な評価がこれまで十分に行われているとは言えず、今後の関西児童文化史研究の展開を期待するという意味においても、本学への論文提出は意義深い。

一方、今後への課題として検討すべき点もいくつか指摘される。

１．近代以前の子どもの文化、明治以降の学校教育や子どもの文化、そして誕生期児童文化、三者の連続性と非連続性についてのより詳細な比較検討をしていただきたい。
２．欧米の「児童文化」に関する理論および実践との異同性と、日本への影響を考察することで、国際的な視野からの誕生期児童文化の相対化を図っていただきたい。
３．誕生期児童文化活動が持っていた理念的特質が今日的に、どのような形で具体化され展開されうるのかについて、その可能性を提示していただきたい。
４．北原白秋の童心観と彼の作品に描かれた子どものイメージとの差異性について、もう少し踏み込んだ議論が必要と思われる。
５．大衆向け読み物や大道芸、流行歌といった、子どもをとりまく「大衆（俗悪）文化」と「誕生期児童文化」との関係性についてもより踏み込んだ言及がほしい。

以上のような課題は残るものの、本論文に対する最終的な評価として、博士号学位の授

与に相応しい論文であることを、審査委員３名が全員一致で認定した。

梅花女子大学大学院文学研究科（児童文学専攻）

博士論文（論文博士）	論文審査日	2013 年 2 月 28 日
	公聴会	2013 年 2 月 28 日
	可否決定日	2013 年 3 月　8 日
	博士学位授与日	2013 年 3 月 19 日

「児童文化」の誕生

―活動の諸相と誕生期「児童文化」の本質の分析―

加藤　理

一　誕生期「児童文化」の本質の解明のために

自明のように使用されてきた「児童文化」という用語だが、この用語がいつ頃誕生し、この用語の下でどのような活動が展開されてきたのか、そして、この用語で表される概念や、この用語の下で展開された活動の本質とはどのようものだったのか、それらに対する歴史的な知見には、いまだに不明なことが多い。そこで本研究では、当時の児童文化活動に関わった人々が残した一次資料を発掘しながら、「児童文化」という用語が誕生するまでの経緯と誕生の背景を探り、さらに、「児童文化」誕生当時の具体的な活動の諸相を明らかにしながら、「児童文化」の本質の解明を目指す。

これらの分析を通して、児童文化にかかわる新たな事実を集積し、誕生期の「児童文化」の活動の諸相を明らかにすることが本研究の第一の目的である。同時に、誕生期の「児童文化」が内在させていた概念と本質を探ることが第二の目的である。誕生期にさかのぼって「児童文化」の本質を探る中から、児童文化研究がこれまで解明できなかった永遠の課題―「児童文化」とは何か―、に対する答えも見出せるものと期待している。

本研究で扱う時期は、「児童文化」概念が誕生したと考えられる大正 10 年前後を中心とする。そして、誕生期の概念を根強く内在させながら児童文化活動が展開していく昭和 5 年頃までの動向を主に確認していく。「児童文化」という用語が誕生し、歴史上空前の児童文化ブームが起こったこの時期の児童文化を、誕生期「児童文化」と名付け、その実態を追及していくことにする。

Ⅰ部では、「児童文化」が誕生するまでの社会の動向を探りながら、「児童文化」が誕生した要因について分析する。そして、「児童文化」が誕生した時期について、新発見の資料をもとに現在確認でき得る最も早い使用例を確認する。

「児童文化」という用語が誕生する以前も、子どもの遊びやおもちゃといった児童文化は存在していた。そこで、江戸時代後期の桑名藩下級武士の子どもの生活を通して、子どもたちが接した文化について確認することから始める。

「児童文化」の誕生は、明治時代を迎えて子どもに関することやものに「教育」的要素を求める風潮が強まり、「教育家族」である新中間階級の人々が都市に増大し、デューイやエレン・ケイらの思想が広まる、といった様々な要因の影響を受ける中から生まれていった。今日大正自由教育と呼ばれる教育思潮が流行し、芸術によって子どもたちの精神を陶冶しようとする芸術教育も流行する。また、子どもとその家庭を対象とした戦略がデパートメントストアで練られ、子ども用品も誕生していく。

こうした、様々な要因について、Ⅰ部では一つひとつ取り上げながら、「児童文化」誕生に至る社会的な状況を分析する。そして、後藤牧星旧蔵資料の中から、「児童文化」誕生時期の手がかりを与えてくれる新資料を紹介し、「児童文化」誕生の時期について分析を加える。

Ⅱ部では、仙台での誕生期「児童文化」の諸相について、スズキヘキ旧蔵資料を中心に

分析していく。

日本で初めての童謡専門誌『おてんとさん』が発行され、仙台での児童文化活動が活発に展開し始めるのは、大正１０年３月である。『おてんとさん』は１年で廃刊になるが、おてんとさん社に集まった人々の活発な活動はその後も続く。学校の教師たちや、日曜学校関係者と連携しながら、様々な場で児童文化活動が展開されていく。

この時期の「児童文化」の本質を解明するためには、特定の地域での児童文化活動の全貌を明らかにし、対象とする地域を増やしながら研究成果を蓄積していくことが必要となる。そうした研究の端緒として、仙台で行われた「児童文化」活動の諸相を明らかにすることで、誕生期「児童文化」の活動の諸相を解明していく。

Ⅲ部では、誕生期「児童文化」の広がりと展開の様子を分析する。分析の対象とするのは、大阪と函館の児童文化活動、学校での児童文化活動、家庭での児童文化活動、学校関係業者の児童文化活動、そして日曜学校の児童文化活動である。

これらの分析を通して、誕生期「児童文化」活動の担い手の広がりや仙台以外の都市での活動の広がりの様子、子どもたちが「児童文化」に接した場の広がりについて確認していく。そして、これらの分析の中から、誕生期「児童文化」活動の本質を浮き彫りにしていく。

二　仙台での活動の諸相―仙台児童倶楽部

誕生期の児童文化活動の諸相について、本論文では、「児童文化」の誕生期に最も活発な活動が展開された地域の一つである仙台で行われた児童文化活動の全体像の解明を目指し、様々な活動の諸相を分析した。

仙台の児童文化活動は、童謡専門誌『おてんとさん』の発行とおてんとさん社同人による童謡童話会をはじめとする各種の企画、『童街』『小鳥の本』『木蔭』などの同人誌発行と童謡創作、小学校教師も多数参加して宮城県図書館を主な会場にして活動が展開された仙台児童倶楽部、おてんとさん社に参集した若者たちによって結成された七つの子社による伊勢堂山林間学校や影絵会、音楽会などの活動、太陽幼稚園を舞台にした活動、日曜学校を舞台にした活動、学校や家庭での児童文化活動、そして、学校を相手にする業者による児童文化活動などをあげることができる。この中でも、仙台児童倶楽部の活動は、誕生期の児童文化活動の特質を示し、時間の経過と共に変質していく児童文化活動の様子が明瞭に表れた活動として注目される。

仙台児童倶楽部は、1923 年(大正 12)4 月に設立されている。仙台児童倶楽部の目的について、発足の前月に出された『童謡童話　おてんとさん』には次のように紹介されている。

> 宮城図書館ではこの度館内に仙台児童倶楽部を新設し、毎月童謡童話会、或は子供にふさわしい音楽会や自由画展覧会などを催すことになりました。「子供は家の宝だと言ひながら、その子供の為には学校を離れて何等の情操教育機関がないではないか、この遺憾を補ひ且つ子供の情操を少しでも美的にしたい、豊富にしたい」と言ふのがその主旨です、その第一回の童謡童話会が四月三日(神武天皇祭)午後一時より図書館児童室で開かれます、沢山子供さん達の御集りをのぞみます。

本部を宮城県図書館内に置き、宮城県図書館長池田菊左衛門を顧問に迎えて、学校外の情操教育の場になることを目的に設立されている。仙台児童倶楽部は 1924 年(大正 13)5 月 23 日には「仙台児童倶楽部一周年記念　野口雨情氏招聘　童謡童話大会」を仙台市公会堂で大々的に催したり、1928 年(昭和 3)11 月 11 日には大規模な「御大典奉祝コドモ大会」を仙台市公会堂で催したりしているが、基本的な活動は月例の童話童謡会の開催である。宮城県図書館や立町小学校講堂などを会場にしながら、多い時には 1000 人ほどの参会者を集めて 1931 年(昭和 6)4 月に池田図書館長が図書館長を離任するまで継続して行われることになる。

仙台児童倶楽部の運営を担ったのが委員である。発足時の委員は 6 名であるが、活動を開始するにあたって増員され、14 名が名簿に記載されている。氏名と肩書きは次の通りである。

表　仙台児童倶楽部委員一覧

氏名	肩書き
本郷　兵一	宮城女子師範附属小学校訓導
黒田　正	仙台市立上杉山通小学校訓導
伊藤　博	仙台市立上杉山通小学校訓導
安倍　宏規	仙台市立上杉山通小学校訓導
蛯子　英二	東北学院高等師範部
鈴木　栄吉	定義電気株式会社
天江　富蔵	おてんとさん社
館内　勇	宮城県工業学校講師
後藤　才治	宮城県男子師範附属小学校訓導
太宰　武雄	仙台市立片平丁小学校訓導
氏家　積	仙台市立片平丁小学校訓導
小松　郁雄	仙台市立五橋小学校訓導
小林　藤吉	宮城県図書館
金　達夫	仙台市立立町小学校訓導

一覧で明らかなように、14 名中 10 人が学校関係者で占められている。小林が宮城県図書館司書であることを考えると、天江とヘキ、そして学生の蛯子を除いた委員が教育関係者だったことになる。学校の教師と民間の活動家が連携して推進される機会が多かった仙台の誕生期「児童文化」活動の特色が委員の選定に色濃く表れている。

毎月開催された童謡童話会は、発足直後は子どもたちの自作童謡の演奏も含めて、プログラムのほとんどが子どもたちによる演奏であった。だが、子どもの出演と子どもの創作の披露は回を追うごとに少なくなっていく。そして、11 月 16 日に通町小学校を会場に開催された第 8 回童謡童話会以降は、子どもたちの出演や子どもたちの創作の披露は行われなくなってしまう。こうした変化は、大正時代の教育界を席巻した自由主義教育に根差しながら発展した誕生期「児童文化」が、自由主義教育の衰退につれて、内在させていた子どもの内発性を重視するという特質が次第に変質していく兆しを示すこととして注目しなければならない。

仙台児童倶楽部内で変化が生じた背景として、社会全体を覆いつつあった自由主義教育

に対する反動を挙げることができる。

1924 年(大正 13)に岡田良平文部大臣によるいわゆる「学校劇禁止令」が出され、同年 5 月には松本女子師範学校附属小学校訓導川井清一郎が副教科書を用いて授業を行っていたことを学務課長が厳しく糾弾する「川井訓導事件」が起こる。社会的に子どもの内発的な動きを重視し、児童中心主義を掲げた自由主義教育が抑圧の中で衰退し、その中で花開いた芸術教育も退潮の兆しを見せていたのである。

仙台児童倶楽部内の問題に目を向けると、芸術教育の立場から教育的意図に立って児童文化活動を推進しようとしていた人びとと、ただひたすら子どもたちと文化の創造や創作を楽しむことを目的にした人びとの二つの潮流が仙台児童倶楽部内に混在していたことを指摘することができる。

既述のように、『童謡童話おてんとさん』第 1 号には、仙台児童倶楽部の設立の目的を説明する際に、「子供の為には学校を離れて何等の情操教育機関がないではないか」と記されていた。つまり、学校で行っていた情操教育を学校外でも行うための活動母体としての期待から設立されたことが記されている。また、『宮城教育』291 号には、「仙台児童倶楽部規約」が掲載され、そこには「児童ノ情操教育方面ヲ研究スル」ことを目的とするとあった。多くの小学校の教員が活動に参加した仙台児童倶楽部には、情操教育の研究機関としての役割も期待され、教員の情操教育への理解の増大と技術の練磨の場となることが期待されていたのである。

前宮城県教育会主事で宮城県図書館長であった池田菊左衛門が組織の中心となり、宮城県下の教育界の重鎮たちが顧問として名を連ね、市内の小学校教員が運営の中核を担っていった事実を考えても、仙台児童倶楽部は学校外での情操教育の実現という目的を強く持ちながら設立された教育機関に准ずる組織だったとみて間違いないであろう。

一方で、ビラの作製や童謡童話会の会場設営を行うといった運営の実働部隊となって活躍したのは、スズキヘキと天江富弥を中心とした旧おてんとさん社に関係する人々であった。彼らは、ヘキに象徴されるように、「童謡を唄つたり、作つたり、小学児童とは遊ぶこと以外つまり先生方のする部面は全然嫌いな立場」であり、「面白い、為になる、ありがたい等の条件のそのさきに、童謡は最も混交のない、純一な詩的な話であれ」との認識を持ちながら児童文化活動を行っていた。彼らは、教育的な意図で子どもたちと児童文化活動を行おうとするのではなく、文化創造や創作を子どもたちと共に楽しみ、童謡や童話を作ったり演じたりすることそのこと自体を楽しもうとしていたのである。

そうした立場で行われた活動の典型に、「たんぽゝ童謡研究会」の活動がある。たんぽゝ童謡研究会は、明戸陽（片平庸人)、赤塚幸三郎、西街赫四（鈴木幸四郎)、山田夢路（山田重吉)、堀田貞之助をメンバーとして、天江富弥、スズキヘキ、蛯子英二を賛助員に結成された組織である。メンバーは、いずれもおてんとさん社に関係した人びとで、仙台児童倶楽部の特別会員として名を連ねる人々である。童謡童話会の際には、会場の設置をはじめとした雑用を行う実働部隊して活躍していた。賛助員に名を連ねる天江とヘキと蛯子は、教員の黒田正、伊藤博、安倍宏規以外の設立時の仙台児童倶楽部の委員である。

こうしたメンバー構成や設立の時期、メンバーの仙台児童倶楽部への参加の様子、そして設立に際して配られた「おねがひ」を見ると、たんぽゝ童謡研究会の設立目的は、①仙台児童倶楽部の雑用を担う実働部隊の結成、②教員主導で設立された仙台児童倶楽部の活

動目的に飽き足りない人びとが集まった活動組織、と考えることができる。

たんぽゝ童謡研究会の活動の中で、特に重要と思われるのが「コドモ野外童謡会」である。これは、榴ヶ岡公園に子どもたちが集り、研究会のメンバーと一緒に目にした景物を題材に即興の童謡を作っていく活動である。仙台児童倶楽部が活動の中心にした大規模な童謡童話会では実現できない子どもたちとの直接的な触れ合いや、子どもと共に文化を創造したり文化に触れたりすることを楽しむための活動として計画されたのである。ここでは、大人と子どもが、共に創作や文化創造を楽しむことが企図されていたのである。

仙台児童倶楽部が活動の中心とした童謡童話会は、初めのうちは上杉山通小学校や木町通小学校、女子師範附属小学校、立町小学校等の子どもたちによる童謡や劇の発表が行われ、子どもたちの文化活動を重視していたことが理解できる。だが、童謡童話会は、次第に情操教育の担い手としての教員たちが口演の技術を練磨し、熟練した技術で童謡や童話を子どもたちに伝え、情操教育を推進することが主な目的になっていったことは否めない。そうした仙台児童倶楽部の動向に対して、童謡や童話を演じることはもとより、童謡や童話を創作することそのものを子どもと共に楽しむことを主な目的にした組織が、たんぽゝ童謡研究会だったのである。

これら二つの潮流と立場の違いは、仙台のみにあてはまることではなく、全国で展開された誕生期「児童文化」活動に内在していたことでもあった。そして、「児童文化」という用語の下での活動や現象にとって、誕生期から現在に至るまで、この二つの潮流の間のバランスと関係をどのように構築していくかということは課題となり続けている。

以上のように、仙台児童倶楽部を分析することで、①教員たちの児童文化活動への参加、②活動の担い手たちの情操教育に対するスタンスの違い、③子どもの創作の位置づけの変化、④児童文化活動をめぐる大人と子どもの関係の諸相、といった誕生期の児童文化活動に内在していたさまざまな要素や問題が浮かび上がってくるのである。

三　誕生期「児童文化」の特質

本論文での分析を通して「児童文化」が誕生して一大ブームが沸き起こった背景と要因をまとめると、①J.J.ルソー、ジョン・デューイ、エレン・ケイらの影響による児童中心主義思想と自由主義教育の広がり、②文化によって精神を陶冶し、真善美聖をめざすことを標榜する新カント派哲学と「文化」の流行、③美育と芸術への着目、④学校外での情操教育への関心の高まり、⑤芸術教育に情熱を傾ける教師たちの広がり、⑥都市に住む新中間階級の勃興と教育家族の誕生、⑦日曜学校や童謡・童話会といった児童文化活動の場の増加、⑧童謡・童話を中心とした児童文芸雑誌の刊行ラッシュ、⑨大量生産・大量消費のモダニズムの進展と顧客としての家庭と子どもの発見、といった輻輳する様々な要因が確認できる。

こうした様々な要因の中でも、芸術教育、児童中心主義思想、自由主義教育、文化主義といった〈思想的なバックボーン〉の存在は、大人たち、特に学校の教師や親が誕生期に「児童文化」活動に取り組んでいく上でのエネルギーの源泉となった。誕生期の児童文化活動を特色づけることの一つに、学校の教師たちの積極的な関わりを挙げることができる。これは仙台だけではなく、大阪でも函館でも、また本論文では詳しく取り上げなかったが福井や新潟、茨城、和歌山、奈良、岡山、大分、佐賀などの活動でも見られたことである。

このように学校の教員たちが積極的に児童文化活動に関わった背景として、〈思想的なバックボーン〉の存在を見逃すことはできない。

第二の特色として、誕生期の児童文化活動では、児童文化活動に接した子どもが内発的な創造活動を行うことで文化活動の主体へと転身し、そこからさらなる活動が展開されていくといった特質が見られる。本論文で分析を加えた様々な具体例で明らかになっていくが、大人が発信した文化に接した子どもが内発的な創造活動を行うことで文化の創造主体となり、文化の創造主体となった子どもが自らの創造した文化の発信者となり、そしてさらにそこからまた文化の受容と創造の循環が子ども自身の内部で、あるいは大人と子どもとの間で、子ども集団の内部で展開されていく。

こうした様々な児童文化活動の実態を確認していくと、子どもたちの児童文化活動は、〈循環〉の形をとって行われていくことが明らかとなる。〈循環〉は、《児童文化との接触→創造・創作→発表・接触》を繰り返しながら行われていく。

〈循環〉が子ども自身の内部で動いていくエネルギーは、児童文化に接触した子どもたちが感じる「心の揺れ動き(アニマシオン)」である。「心の揺れ動き」は、「憧れ」や「楽しさ」「感動」などといった形となって子どもの内部に現れてくる。

強い「憧れ」を感じながら自身の内部で〈循環〉を行っていった例は、多くの人物で確認することができた。『少年世界』の記者だった木村小舟の文章に接して「憧れ」を抱き、友人たちと廻覧雑誌を作った大西伍一、スズキヘキ兄弟の手作り雑誌を見て「憧れ」、自身も手作り雑誌の刊行に励んだ鈴木正一や千葉貴策ら黒田学級の子どもたち、兄姉が童謡を創作して歌う姿に接して「憧れ」を抱いた弟妹たちが童謡作りを始めた小倉兄弟、そして鈴木正一兄弟、島貫兄弟、スズキヘキ兄弟など、こうした子どもたちの姿を多数確認することができる。彼らの様子を見ていくと、次のような動きを確認することができる。接触した児童文化に「憧れ」を抱き、自身も創作を始める。創作した作品を発表すると、発表に対して様々な反応が寄せられる。合評会の席で俎上にのせられて批評がなされることもあれば、回覧雑誌の場合、書き込みによる批評が行われることもある。そうした様々な反応や、読者との出会いや評者に接触することによって突き動かされた意欲は、新たな〈循環〉の出発点となって次の創造・創作を行い、創作した作品を発表し、また〈循環〉を繰り返す。「児童文化」の誕生期には、こうした〈循環〉が自然に展開されていく環境や場が整っていたのである。

〈循環〉のエネルギーとなる「憧れ」は、大人と子ども、異年齢の友だち関係、兄弟姉妹・従兄弟関係、雑誌に作品が掲載された人物との文通など、〈人間関係〉の中で生じている。特に、子どもと共に楽しむ大人が身近にいて、子どもの内部に〈憧れ〉が生じていく例を数多く確認することができた。大人と子どもが共に児童文化活動を楽しむ場が誕生期の児童文化活動に存在し、その中で子どもと共に「創造生活」を過ごす人々が、「児童文化」の誕生期には多数存在していたのである。大阪の蜻蛉の家の活動やヘキらおてんとさん社の活動、さらに日曜学校や林間学校での大人と子どもの児童文化を通した触れ合いなど、〈憧れ〉が子どもの内部に発生する場や機会が、「児童文化」の誕生期には様々に用意されていた。

このように〈循環〉の様子を見ていくと、〈循環〉を繰り返しながら、多くの場合、その創造・創作の質と内容は向上していく場合が多い。「児童文化」の誕生期に児童文化に接した子どもたちの多くは、自身の内部でぐるぐると〈循環〉を繰り返しながら、あたかも竜

巻が回転しながら回転で生じたエネルギーで空に上昇していくように、創造・創作の質は上へ上へと向上を続けていったのである。「児童文化」に接した多くの子ども自身の内部で、〈循環〉を繰り返すエネルギーと、上へと向上していく力が同時に生れていたのである。

〈循環〉は、個人の内部だけで生じるものではない。集団の中でも「心の揺れ動き(アニマシオン)」をエネルギーとしながら《受け手→作り手→送り手》という〈循環〉が生じていた。

その典型的な様子は、仙台の児童文化活動の中で確認できた。天江富弥やスズキヘキら、仙台における児童文化活動の第一世代が行う活動に接し、児童文化の「受け手」として「心の揺れ動き(アニマシオン)」を感じて児童文化活動を行うことに楽しさや喜びを見出した鈴木幸四郎や静田正志、小倉旭、山田重吉ら第二世代は、自らも主体的な児童文化の「作り手」となり、さらに次の世代である鈴木正一や千葉貴策らに児童文化を発信する「送り手」となっていく。第二世代が発信する児童文化に「受け手」として接して「心の揺れ動き(アニマシオン)」を感じた鈴木正一らは、今度は自らが「作り手」となってさらに次の世代に文化を発信する「送り手」になっていく。

こうした〈循環〉が各地で発生していたことは、「児童文化」の誕生期に顕著に見られた特質として重要である。この〈循環〉によって、「児童文化」活動にダイナミズムが生れ、年代を超えて「児童文化」活動が展開されていくエネルギーとなっていったのである。

歴史上空前のブームを生み出した「児童文化」の誕生期に、〈学校教育〉と密接な関係を持ち、〈思想的なバックボーン〉が活動に向かうエネルギーを多くの人々に与え、個人の内部と集団の内部で生じていた二つの〈循環〉が、「児童文化」の誕生期の活動を活性化し、児童文化活動の継続と継承を推進する力を生み出していたことを、誕生期の「児童文化」が持っていた特質として指摘することができる。

おわりに―「児童文化」とは何か―

誕生期の児童文化活動の分析の結果、学校教育や教師、家庭教育など、「児童文化」と「教育」の関係について、先行研究で述べられてきたことの見直しが必要となる。

これまでは学校教育・学校での文化に対して、児童文化は学校外での文化と位置付けられ、児童文化は学校教育・学校文化に対立するものと考えられることが多かった。だが、様々な資料をもとに「児童文化」の誕生期の活動を分析した結果、「児童文化」は学校教育・学校文化と対立するものではなく、密接な関係を作り上げながら活動が展開されていたことが確認できた。「児童文化」と「教育」との関係を正しく把握することが、誕生期の「児童文化」活動について考え、児童文化とは何かを考えていく上で、考察の軸として重要になってくる。

仙台の児童文化活動を検証していくと、「児童文化」と「教育」の関係を明らかにする上で大きな示唆を与えてくれる出来事に遭遇する。すでに紹介した仙台児童倶楽部の運営を手伝っていた若手の中からたんぽぽ童謡研究会が誕生したことである。既述してきたように、仙台児童倶楽部には、芸術教育の立場から教育的意図に立って児童文化活動を推進しようとした学校の教師を中心とした人びとと、ただひたすら子どもたちと文化の創造や創作を楽しむことを目的にした人びとの二つの潮流が混在していた。学校外での情操教育を充実させて子どもたちに真善美聖を実現しながら子どもの向上的な形成を図ろうとする多

くの教師たちの認識と、知識では知ることのできない世界を文化活動の中で感じることを求めた黒田正や、文化の学習化を否定して文化活動に没入することを重視した千葉春雄、さらに児童文化活動を遊ぶことと認識していたスズヘキらとの認識の違いは、自然的存在としての人間から文化的・社会的存在としての人間への移行を目指してなされる「発達としての教育」と、有用な生の在り方を否定して至高性を回復しようとする「生成としての教育」を援用して考えることで説明することができる。

向上的な形成を目指して行われる「発達としての教育」は、「社会化・文化化」や「発達」「形成」といった用語で説明される周知の概念である。一方の「生成としての教育」は、「有用性の原理に支配された事物の秩序を破壊し、内奥性を回復しようとする」ものである。

人間はヒトとして生まれるやいなや、社会のルールや文化を身につけて社会内存在になるための社会化や文化化、人間化が行われていく。その過程では、本能に根差した本来の意志や欲求と異なることを強いられ、極度のストレスを伴っていく。また、常により良い形成と向上を求めていく「発達としての教育」の中では、行動は「〇〇のため」になることを期待されて有用性の原理にしたがって選択されていく。そこでも、自分の意志とは異なる行動を要求され、やはり極度のストレスの中で「〇〇のため」になることを期待される行動を行うことになる。

このように、自分の意志を削ぎ落としながら進められる人間化・社会化・文化化と発達としての教育の中では、極度のストレスを感じると同時に、自らの行動を選択する意志の力を抑えられながら進められていく。その結果、行動を選択する意志の力を次第に衰弱させながら、向上的な形成を果たすことが求められていくことになる。

だが、人間の成育は、こうした「発達としての教育」だけで行われていくものではない。「発達としての教育」が進められていく中で削ぎ落された選択する意志の力を取り戻し、心身に蓄積した極度のストレスから回復することを、人は無意識のうちに要請していく。本を読んだり、音楽を聴いたり、絵を描いたり、詩を創ったり、工作をしたりといった様々な文化活動に〈没頭・没入〉することは、「発達としての教育」の中で喪失した選択する意志の力の回復と、極度のストレスからの回復を求めてなされることなのである。

矢野智司は『自己変容という物語―生成・贈与・教育』の中で、「人間化」によるストレスから解放され、人間が本来持っている至高性を回復するための「脱・人間化」には、何物かのために消費されたり使用されたりすることから離れ、ただ消費のために消費し尽くされる、といったことが必要だと説明する。文化化や社会化の中では、自らの意志を大切にすることよりも、規範や法といった所与に服従することが優先される。そのため、その状態から脱却するためには、「〇〇のため」に行動・活動することを求められる「有用性の原理」からの離脱が必要になるのである。つまり、特定の目的のために行う行為や活動とは無縁の、目的を持たずに行う行為や活動への〈没頭・没入〉が必要になるのである。そこで行われるただ消費するためだけの消費の典型として、矢野は、目的地も持たずにただ歩む「散歩」、あるいはいかなる有用な生産物も生み出すことなくただエネルギーが消費される「遊び」など、「蕩尽」と表現できる活動や行為を挙げている。

「蕩尽」と見なすことができる〈無意味〉な行為に没頭することは、何ものかを生み出そうという目的には支配されず、ただひたすら、作ったり描いたりといった、行為そのものを行うことだけが目的の行動である場合が多い。つまり、何ものかを生み出すというこ

とを意識することなく選択されている場合が多いのである。無意味な行為に没頭することは、有用性の原理には支配されず、むしろその対極に位置づく行為として解釈できるのである。そして、〈無意味〉で無用な「蕩尽」に没頭する行為は、より良い未来や向上的な形成の実現のために現在が支配される有用性の原理や、「発達としての教育」を通して実現が図られる人間化・社会化・文化化とは一切無縁でありその対極に位置づくからこそ、無意識のうちに要請される行為だと考えることができる。

こうした「発達としての教育」の一方の「生成としての教育」が保障され、文化にただひたすら〈没頭〉する時間や機会を保障されることが、「発達としての教育」の中で喪失した選択する意志の力を回復しながらなされていく人間の成育にとって、きわめて重要なことなのである。

誕生期の「児童文化」を見ていくと、教師や親を中心に、真善美聖の実現を目指す情操教育のための「児童文化」を子どもたちに提供し、その中で子どもたちは向上的な自己を形成する様子が確認できた。そこで提供される「児童文化」は、精神の陶冶のために、あるいはより善い自己を形成するために子どもたちに提供されるものであった。その意味では、「〇〇のため」に提供される文化であり、有用性の原理によって子どもたちに提供された文化だったと言える。

一方で、子どもたちが大人たちの意図する有用性の原理から離れて、童謡を作ったり歌ったり、雑誌を発行したりといった児童文化活動を楽しみ、その中に没頭する姿も確認できた。子どもたちの活動には、「〇〇のため」に行うという有用性の原理とは一切無関係に、ただ楽しむために児童文化活動を行う姿を確認することができた。

以上の事を踏まえて仙台児童倶楽部の教師たちを中心とした活動と、その中から独立していったたんぽぽ童謡会の活動との関係を考えると、「〇〇のため」に児童文化活動を行う「発達としての教育」と、そうした有用性の原理から離れ、ただ楽しむために児童文化活動を行う「生成としての教育」との関係として両者の活動を理解することができる。「児童文化」の誕生期に仙台で行われていた活動では、「発達としての教育」の枠組みの中で行われる活動と、「生成としての教育」の中で行われる活動の双方が、バランスよく活発に展開されていたのである。

従来の児童文化研究では、「発達としての教育」の中での児童文化と「生成としての教育」の中での児童文化は、せめぎ合いながら対立する概念のようにみなされてきた。だが本来、両者は対立する概念ではなく、双方で補完し合いながら子どもの成育に位置づいていくものである。児童文化が向上的な形成や精神の陶冶を考えて行われるだけでは、児童文化は子どもにとって学校教育で接する教科と変わりないものとなってしまう。一方で、児童文化がそうした目的と一切無関係になってしまうと、児童文化が持つ豊かな形成の力を疎外してしまうことになる。

「児童文化」の誕生期には、学校教育と教師が積極的に児童文化活動に関与することで、有用性の原理に支配された中で「児童文化」が有効に活用され、その一方で、仙台のおてんとさん社や大阪の蜻蛉の家の活動のようにただひたすら児童文化を楽しむ機会や場が豊富に子どもたちの生活の中に存在していたのである。両者が子どもの生活の中にバランスよく存在していた「児童文化」の誕生期は、空前の児童文化ブームの時代だっただけではなく、子どもと児童文化の関係にとって、まさに理想的な時代でもあったのである。

子どもたちは、有用性の原理に基づいて児童文化を提供される時には文化の客体となり、有用性の原理と無関係に没頭して楽しむ時には文化の主体として活動していた。客体から主体への変化と〈循環〉が対立したり矛盾したりするものとしてではなく、個人の内部で、あるいは集団の中で、ごく自然に行われていたことも、誕生期の「児童文化」に顕著に見られることであった。

誕生期「児童文化」の世界は、実に広大に広がる豊かな世界であった。様々な表情を見せる誕生期「児童文化」の具体的な諸相の分析を通して、誕生期の「児童文化」が包含していた概念が明瞭な像となって浮かび上がってきた。

「児童文化」とは、有用性の原理に基づいて形成に資することを期待して大人たちによって提供される活動や場、そして文化財と、その中での子どもたちの創造活動と作品、さらに、有用性の原理とは無関係に子どもたちがただひたすら〈没頭〉して楽しむ行為や文化財とその中での創造活動と子どもたちの作品、この双方の概念を包含する用語だったことが理解できる。